

堀景山『不尽言』
——〈自然〉の再出現の意義——
吉川 宜時（無所属）

堀景山の思想史的意義から直接的な影響をみるならば、それは宣長の初期の業績への一点に係わってくるようである。従来研究においても「後世の我々が近世思想史を見た時、契沖・徂徠と宣長は不可欠であるが、景山はいなくても済むのである」（日野龍夫「『不尽言』解説」という割り付けに置かれていた。

それには理由があり、従来研究においては景山の主著『不尽言』は、これまで宣長研究の立場から、初期宣長への影響としての「もののあはれ」論と人情論、あるいは景山の経世的な言説は切り捨てた文芸的側面の受容、等々である。

しかしながら、『不尽言』を一個の著作として読むならば、景山を徂徠からの影響下に閉じこめたり、あるいは宣長の受容面のみを取り上げたりする見方では不十分である。

丸山真男『日本政治思想史研究』における景山は、徂徠学と国学との関連性から見られており、今日流通している典型的な景山観と言えよう。丸山の立論からすれば、景山は徂徠の思想圏内にあるものとされている。そして、丸山の立論は有名な「「自然」と「作為」」という枠組みから徂徠学と宣長・昌益が把握される。ただし、今日では周辺の研究が進み、またこの枠組みに対する批判も出ているが、これの乗り越えが果たされるような思想史叙述がなされていない。ここで注意したいことは、丸山による「「自然」と「作為」」の枠組みによる思想史の叙述方法の当否ではない。むしろ、このような独特な枠組みを構築したにも関わらず、景山の位置は不当に見えることにある。それは丸山が景山をあくまでも徂徠の思想圏内に位置づけたことによる。宣長・昌益に対して行った「作為」の論理継承の考察は景山においてはなされなかったのである。丸山の見解を媒介にして景山を捉え直す必要があると思う。なぜなら、景山もまた「「自然」の高唱者」であったと考えるからである。

『不尽言』を一読して目を引くのは「自然」という語の頻出である。これを以て宣長が説いた「自然之神道」との関連性を性急に直結させるのではなく、まずは景山の説く「自然」が何かを探求する。徂徠は「聖人之道」を説く上で〈自然〉を切断したわけだが、周知の通り、丸山は「自然的秩序観」を覆し、「主体的人格」を立ち上げたところに徂徠の思想史的意義を見出す。すなわち、〈近代〉の発見である。しかし、そもそも〈自然〉を基礎としないところに主体は立ち上がるのであろうか。景山によって〈自然〉を《再出現》させたことの思想史的意義を問い、「「自然」の高唱者」とされた宣長や昌益を捉え直す契機としたい。